## 神野の土井昭雄家の板碑群調査の報告 蕨 由美

2020年6月27日、当会の村田一男顧問の呼びかけで、10時に8名の会員が集まり、土井昭雄氏のご厚意で、同家所蔵の板碑群の調査を行いました。

午前中は、納屋と庭先をお借りして、保管場所から運び込んだ板碑を洗い、村田顧問の指導で、分類と計数を行い、午後からは1点ずつ、計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入、拓本採りと写真撮影を行い、午後3時過ぎに終わりました。



この板碑群は、本年2月22日の神野地区のフィールドワークで土井家に立ち寄った際に見せていただいたものです。同家敷地内保管の多量の中世板碑群で、未報告の板碑群であったことから、今回の調査となった次第です。

「板碑」とは、板状の石材に仏像を表す種子 (しゅじ)や被供養者名や年月日を刻んだ石塔 で、鎌倉時代から室町時代の仏教の供養塔です。

今回調査したのはすべて「武蔵型板碑」で、秩 父産の緑泥片岩を使用し、頭部が三角で二条線を 刻み、薄く長細い形をした関東に多い板碑です。

調査した板碑の総数は121点、うち無刻で上下不明の断片35点を除くと、基数は86基以内と推定され、ほかに小型の五輪塔の空風部分がありました。

有刻の完形碑 12 基と、上部または下部の断碑で 銘がありそうな板碑数点の拓本を採り、種字や年 銘を調べました。

種字はすべて阿弥陀如来を表す「キリーク」一尊で、蓮座を伴い、中には花瓶の表現が残っているものもありましたが、被供養者名の銘はありませんでした。

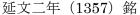
年銘のあるのは9基で、北朝年号の延文二・ 三・五年 (1357~60)、長禄五年 (1461) と寛正 六年 (1466) が各1基、文正二年 (1467) が2 基、文明九・十年(1477~78)が各1基でした。

千葉県の武蔵型板碑の年銘のピークは 14 世紀中葉と 15 世紀後葉にあり、今回の調査例も同じ傾向でした。

また「長禄五年」銘碑は、月日の数字がなく、 同4年12月に寛正に改元されていることから、半 製品と思われます。

その他、キリークー尊と弧状線の略式蓮座のみの粗雑なもの十数基、また完形でありながら、無刻で粗雑な小型の板碑が 11 基ありました。このような無刻の板碑は、印西市の吉田天神前遺跡出土の板碑群でも多く見られ、本間岳人氏は「粗雑にみえるがあくまでも製品であり、板碑として造立されたもの」と推定されています。(「印西の中世板碑をさぐる」『印西の歴史』第12号2020・3)







長禄五年(1461) 銘

神野では、これまで小名木淳家の康永三年銘ほか 13 基、土井秀雄家墓地の延文銘ほか 10 基、福田広家の 2 基の武蔵型板碑(種子は全てキリーク)が、また神野新山から玉蔵院に移された胎蔵界大日如来の種子「アーンク」と多数の戒名を刻んだ南北朝期(推定)の大型の下総型板碑が報告されています。(『八千代の歴史 資料編 原始・古代・中世』1991)

これらの既報告例に合わせ、今回の調査結果と 分析によって、神野の中世の信仰の姿と時代背景 がより詳しく見えてくることが期待されます。